

## 平成27年度授業づくり拠点校 実践事例

## 1 本校の研究の概要

## (1) 本校研究主題

主体的に考え、表現する力を育てる授業を求めて  
～言語活動の強化を通して～

## 【主題設定の理由】

大きく2つの理由で主題を設定した。

1つ目は、本校の学校教育目標「自ら気づき、考え、よりよく行動する生徒の育成」を達成するためには、目指す生徒像を具体化・重点化しなければならないと考えたからである。

2つ目は、国際化、情報化が急速に進展する時代の中で、子どもたちが身に付けておくべき力として、自分の考えや思いを説明したり発表したりできる表現力は不可欠であると考えたからである。さらに、全国学力・学習状況調査からも、読み取って書く問題や、自分の考えを説明する問題で、正答率が低い結果が出ている。

それらを踏まえて、本年度は、言語活動の強化に力を入れて、指導方法を工夫していきたいと考える。

## (2) 主題追究のための授業展開の工夫

主題を追究するために、「言語活動」をキーワードとして研修を進めた。まず授業の中で、言葉を用いて表現する場、互いの思考を共有する場をどう設定すればよいかを探った。そして、課題を解決していく過程で、「思考」「判断」「表現」の場面すべてにおいて、言語活動を強化する授業展開を工夫した。

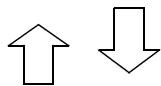
具体的には、夏季校内研修会でいただいた義務教育課からの指導助言を、学校全体で取り組むための方向性として、各教科で言語活動強化にかかわる取組を話し合い、実践した。同時に、全体や少人数グループでの授業研究を通して、指導技術や方法を学び合い、それぞれの授業改善に活かす努力を継続した。

## 2 本校研究主題と活用力向上のための研究とのつながり

活用する力を高めるための授業改善の視点として、「学習意欲を喚起する手立ての工夫」「自ら考え、判断し、表現する場面の設定」「学習したことを振り返る場面の設定等」と考えられる。その中の2つ目に視点をあて、校内研修とのつながりを考えた。

＜活用力向上のための視点＞

習得した知識・技能を活用して課題を解決するために  
思考力、判断力、表現力等を育てる。



＜本校の授業展開工夫の視点＞

言葉で表現する場・互いの思考を共有する場を積極的に  
設定することで、思考力、判断力、表現力等を育てる。



＜夏季校内研修会＞



＜グループ授業研究＞



＜授業づくり拠点校研修会＞



＜校内授業研究＞

### 3 公開授業指導案

#### 1年1組 国語科学習指導案

指導者 周南市立太華中学校

柏村 純子

場所 1年1組 教室

1 単元 古典「とらわれた心に突き立つ矢一字治拾遺物語」

2 単元構成の意図

(1) 生徒観

生徒が古典教材に出会うのは、「竹取物語」に続き、二作目である。小学校で「竹取物語」の冒頭文を暗唱したことがある、と述べた生徒が各クラス3、4人程度いるくらいで、ほとんどの生徒にとって、古典は初めて読むものである。今回、自分たちが幼い頃親しんだ「竹取物語」が、千年以上も前の「見ぬ世の人」が描いた作品であるということや、紫式部もそれを読んだということを知り、驚きと感動を隠しきれない様子であった。

課題としては、入学当初から、学習習慣や授業規律が確立されていない生徒が多く見られ、じっくり考えることを特に苦手としていることが挙げられる。よって、これまで、生徒が比較的得意とする「音読」や「発表」などを中心に授業を進めてきた。初めて行う古典の授業に際しても、「竹取物語」では音読や暗唱を中心に行ってきたので、古典との出会いは楽しいものとなったようである。しかし、今回はそこから一歩進み、言葉をきちんととらえ、考えたことを「書く」という活動を仕組みたいと思う。

(2) 教材観

本教材は、鎌倉中期に成立した「今昔物語」と並ぶ代表的な説話集で、人間や社会への鋭い批評に特徴がある。また、一作目の古典教材「竹取物語」とは違い、説話的、教訓的要素が濃い。よって、音読だけではなく、内容理解を深めさせるのには良い教材である。何気なく耳にしてきた昔話の原型が、この説話集にあるということは、生徒にとって、新鮮な驚きがあるだろう。そして、それが読み継がれ、語り継がれてきた理由は、物語を通じて、作者が子どもたちに何かを伝えたいからであると考えられる。中学生になった今、それらについて考えることは、古典の世界についての新たな興味・関心を、喚起することができるのではないだろうか。

本文は、原文と現代語訳とが織り交ぜてあるため、内容を理解しやすい。また、「聖」と「獵師」とを比較して考えることで、この作品の伝えたいことがより明確に見えてくる。よって、生徒は、読み取り、考えた

ことを、「書く」活動へ、よりスムーズにつなげていくことができるであろう。古典教材であるが、現代文と同じように、表現に着目して意味を考えたり、文章に表れているものの見方や考え方をとらえたりすることで、読む力を付けることができる教材であると考え。

### (3) 指導観

第1次では、歴史的仮名遣いに気をつけながら、リズム良く音読させる。第2次では、会話主に気をつけて音読し、口語訳を参考にすることで、正しく内容理解をさせる。そして、一般的に知者とされる「聖」と、彼を援助しながらも、殺生を生業とする「獵師」の二人の人となりを読み取らせたい。

第3次となる本時では、第2次で読み取った二人の人々を確認した上で、実は、真実を見抜く目をもっているのは「獵師」であり、「聖」は一つのことに夢中になりすぎたため、判断力を欠き、狸に化かされてしまうのである、ということを読み取らせたい。そして、「無知」という言葉の意味を考えることを通して、物事を正しく判断する目をもつことや、考える力を養うことが、人として大切であると説く作者の考えに気付かせたい。また、説話集のもつ教訓的な部分、つまり作者が私たちに語りかけていることを、自分たちの経験を踏まえて考えさせ、それを「書く」ことによって表現させたい。

第4次では、表現したものを互いに読み合い、評価項目に従って指摘し合う活動を仕組み、さらに自分の考えを深め、書く活動の意欲へとつなげていきたい。

## 3 単元目標

- 登場人物や語り手の言葉に着目しながら、古文を音読することができる。
- 説話的、教訓的な内容を含んだ古典を読むことで、「見ぬ世の人」の考え方を身近に感じ、それを「書く」ことで表現することができる。

## 4 指導計画（全4時間）

次	主眼	配当時間数
1	説話集「宇治拾遺物語」を通して、中世文学史について知ると共に、歴史的仮名遣いを正しく読むことができる。	1
2	会話主の言葉に着目しながら、口語訳を読むことを通して、内容理解を深めることができる。	1
3	語り手の批評を読み解くことを通して、作者が私たちに語りかけていることを、今の自分とつなげてとらえ、「書く」ことで表現することができる。	1 (本時)
4	「書く」ことで表現したものを読み合うことを通して、互いの良さを指摘し合うことができる。	1

1 主眼

語り手の批評を読み解くことを通して、作者が私たちに語りかけていることを、今の自分とつなげてとらえ、「書く」ことで表現することができる。

2 準備物

学習プリント、ホワイトボード、短冊黒板、プレート(人物、最後の2文、めあて、ふり返し)、ふり返しシート

3 指導上の留意点

①「無知」と「慮り」の意味を考え、聖と猟師の人となりや行動に着目させる。

②他の説話集を例に挙げることで、本文にない最後のまとめを想像しやすくさせる。  
③説話集のもつ教訓的な部分、今の自分たちの実生活とつながっていることを感じさせる。

評価

語り手の批評を読み解き、作者が語りかけていることを今の自分とつなげてとらえ、書くことができたか。

ふり返し

◎あなたはこの教訓をどう思いますか？◎

- ・共感する？共感できない？
- ・立場を決めて、理由と共に書こう。

◎本文の最後に教訓を加えてみよう！◎

- ・一つのことを懲りすぎて周りが見えなくなっているはいけない。
- ・真実を見抜く目をもとう。

\*短冊黒板をホワイトボードに貼る。

猟師 なれども

- ・聖を尊敬、援助
- ・学問していない
- ・殺生する

慮り ありければ、狸を射殺し、その化けを現しけるなり。

- ・自分を客観的に見られること。(無知の知)・疑問をもつ力
- ・確かめる力・目の前のことを判断する力があること。
- ・思慮・考慮

聖 なれど

- ・法華経を信仰
- ・立派な人
- ・人がよい

無知 なればかやうに

- ・物事に夢中になりすぎて周りが見えず判断力を失うこと。
- ・信じるだけで、自分で考える力がないこと。

化かされけるなり。

めあて 語り手の批評から、作者が語りかけていることをとらえよう。

聖 ・ 猟師 ・ 語り手

十一月十七日

とらわれた心に突き立つ矢『宇治拾遺物語』

本時の流れ

- ①本文を、歴史的仮名遣いと会話主に気をつけて、音読する。(12分)
    - ◆ 聖・猟師・語り手に分かれて音読させる。
    - ◆ 読み終わった後、概要を確認する。
  - ②最後の二文に着目する。(5分)
    - ◆ 範読後、全員で音読させ、めあてを提示する。(↓学習プリントを配布)
    - ◆ 聖と猟師の人となりについて確認する。
  - ③無知と慮りの意味を考える。(8分)
    - ◆ 「なれば」と「ありければ」の意味から、無知と慮りが、後に続く言葉の理由となっていることを確認する。
    - ◆ 無知について、辞書の意味ではうまく説明できないことを指摘する。
    - ◆ 意見を発表させ、まとめる。
  - ④作者が語りかけていることをとらえる。(12分)
    - ◆ 他の説話集の教訓を思い出させる。
    - ◆ 自分が親だったらどう語るか考えてみよう助言する。
- 本文の最後に教訓を加えてみよう！**
- ◆ 本文に付け加える形で、作者の意図を書かせる。
  - ◆ 「無知」の意味を入れて書くよう指示する。
  - ◆ グループでまとめ、ホワイトボードに短冊黒板を貼らせる。
- ⑤最後の一文を今の自分とつなげて考える。(10分)
- あなたはこの教訓をどう思いますか？**
- ◆ 共感するか、共感できないかの立場を明確にし、理由と共に、二段落構成で作文する。
- ⑥ふり返しをする。(3分)
    - ◆ ふり返しシートに、今日の授業で学んだことを書かせる。

## 4 研究協議の概要

### (1) グループ別討議

周南地域の小・中・高等学校から30名近くの参加者があった。

授業の前に、本校の研修説明と当日の授業説明を行った。授業説明の中で、生徒に考える力を身に付けさせたいという思いから、「考えたことを書く」という活動を設定したこと、授業参観の視点として、「言語活動の充実」及び「効果的なグループ活動」の2つを、参加者に示した。

授業後には、エネルギーでテンポのよい授業であったという感想が多くあった。また、大きな声での古文の暗唱、意欲的に発表する姿など、生徒の頑張りに多くの参加者から称賛の声をいただいた。

研究協議は、5つのグループに分かれ、ワークショップ形式で行った。

読み取ったことをもとに作者の意図を教訓として書かせる活動、グループで話し合っ一つの意見にまとめる活動、教訓に共感するか共感できないかの立場を明確にして二段落構成で作文するという活動が、参観の視点と大きくかわる部分であった。

また、一人では考えをまとめきれない生徒が、グループ活動の中で他の生徒の意見にふれることで一緒に考えることができた点や、条件を付けて作文を書かせるという点が評価された。

一方で、多様な意見を出させるような問いかけの工夫や生徒が書きやすいようなヒント提示の工夫、グループ活動の目的をどこに置くかなどが、今後考えていくべきこととして挙げられた。



<公開授業：小集団活動>



<研究協議：ワークショップ>

### (2) 指導助言から

授業を構想するときに、どんな力がつく授業なのかを考える必要があること、そして、その力を発展させることが活用へとつながっていくこと、活用には「何かのために」や相手意識のある活動が必要なことを、教えていただいた。また、教師のリードのもとで、よい学びをしている状態を、いかに生徒が自分たちの手で学びを構築できる形へもっていくか、主体的に学ぶためにはどうしたらよいかを考えていくことの大切さを、今後の課題として示していただいた。

## 5 成果と課題

授業の終末において、振り返りを行っている。以下は、振り返りシートに書かれた生徒の感想の一部である。

### <国語科>

- ・条件のもと、みんなで話し合っまとめる活動がおもしろい。
- ・2学期は、これからの生活に活用できることがたくさんあったので楽しかった。古典は少し難しかったけど、昔の人の思いが伝わってきた。
- ・教科の中で一番楽しかった。みんなで話したり、意見交換したりする場が多かったのがよかった。
- ・グループで活動したときに、分からないところを聞いてよかった。

### <社会科>

- ・ディベートを行ったことで、他の人の意見を聞き、深く考えることができた。またディベートをやりたい。

### <英語科>

- ・1分間フリートークは大変だったけど、友達の発表を聞いて、とても参考になった。
- ・班で活動して、みんなと協力するのがとても楽しかった。英語でゲームをして人と話せたので、とてもおもしろかった。

### <家庭科>

- ・幼稚園で、幼児とどのように接したらいいかを班で話し合っ、イメージがなんとなくつかめた。

### <美術科>

- ・自分が描いた構想画を、友達に説明するのがむずかしかったけど、最後まで言えてよかった。

本校では、副主題にも掲げているように、「言語活動」に視点をあてて研究を進めてきた。活動の内容や形態を工夫するなど、各教科で具体的な取組を続けており、その成果が上記の生徒の率直な感想にも、具体的な言葉として表れている。言葉を大切にすることで、言葉の力を育み、強化できると考えた。

一方では、夏季校内研修会で、「言語活動が目的になってはいけない」「各教科の目標を達成するための手段である」「各教科の目標に照らして、言語活動をどう使っていくかが大事」「活動あって学びなしになってはいけない」など、本校の今後の取組に対して貴重な指導助言をいただいた。生徒に各教科で身に付けさせたい力を明確にし、授業改善、教材開発に努めていかなければならないと改めて実感した。

今回の国語科による授業づくり拠点校研修会で得たことを、すべての教科・領域に広げ、生徒のさらなる変容を目指して、授業づくりに努めていきたい。